幻想祭典

澤野久雄

幻想祭典

澤野久雄

毎日新聞社

目

次

男ひとり　七
魔術　三三
夜雨　四一
映像　五九
花しずめ　八〇
再会　九七
天の部屋　一一三
幻影　一三四
岐路　一六一
傾く　一八八

恐るべき少女　二一〇
障碍　二二四
迫り来る潮　二三三
追われる男　二六九
別れのとき　二九八
炎　三一八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装本　朝倉　摂

幻想祭典

男ひとり

人はいつでも心の底で、ひそかに祭の日を待っているものだ。——

忙しい生活の波浪の中では、それを意識することは少いかもしれない。幼時の記憶は眠ってしまっているだろうか。しかし、たとえ眠っている記憶の中にでも、祭の日を待つ心のときめきは、ひっそりと生きているのである。

古い歴史と習慣を担った町を故郷に持つ人は、その町の伝統と格式のある祭を、遠い地方の山村に故郷を持つものは、その土地の鄙びた祭の習俗を、——それが収穫祭なら、野末に鳴り渡る太鼓の音を、道ゆく人びとのさんざめきを、あるいは社の境内にならぶ物売りの露店の、明るい灯影と商人たちの呼び声とを、——人びとは何かの折に思い出すのではないか。

神楽殿に舞う人のかぶる、古い面の妖しさ。かがり火をうけて光る、その面の肌の不気味ななめらかさ。——結城千鶴が、唐突にそういう印象を目の中によみがえらせたのは、一体どういう理由からだったろう。

いま、すぐ先の美しいホテルで、花やかな結婚の披露宴がひらかれる。そこに集まる人たちの顔にうかぶであろう、作られた面のような様々な表情を、ふと予想したからであろうか。それとも結婚式というものを、祭のようにぎやかな、一つの行事と思っていたからだろうか。

虎の門を抜けた車が、燈火の満ちあふれる新しいビルの角を、急に左に曲った。突当り、緩やかな坂の上には、アメリカ大使館の白い建物が、静かに夜を迎えようとしている。車は徐行し出した。道が、混み合っている。突然うしろの方で、はげしいクラクションの音が響いた。

——急いだって、仕様がないのに……。

車はそこでは、二列になって徐行していた。前の車に、ついてゆくより仕方がない。

大きなホテルだと言っても、平常の日はこんなには混まない。

「これ、みんなお祝いにゆく人たちの車かしら……」

と、結城千鶴は並んで腰を下している菅治子に言った。彼女たちが乗っているのはタクシーだが、前後を埋めているのは、白ナンバーばかりであった。うす暗い道でも、車体のつややかな光が見える。

「さすがに豪華版よ」
と、菅治子は言った。結婚するのが、売出しの映画監督と、有名な女優である。
「少し、肩身がせまいかしら？」
「何を言うのよ、あたしたちはあたしたち……」
「でも、いい車ばかりね」
千鶴が、そう言った時だった。
二人の乗っているタクシーが、前をゆく車からやや離れた。と、その途端にまた、けたたましいクラクションの音がして、右うしろから鋭く一台の車が突っ込んで来た。
スポーツ・カーだった。寒いのに、ボディの天蓋を外していた。バァバリーの青年が、ハンドルを握っている。
「あら、どうかと思うわね」
治子はそう言ったが、それは青年の運転の仕方を言ったのだろうか。それとも、寒いのにオープン・カーを操る男の、神経について言ったのであろうか。
二、三台前の車から、順に左に折れはじめた。ホテルのフロントに向うらしい。忽ち、二人の車も左折した。と、突然、前の車がアクセルをふんだらしい。つい、とハンドルを右に切ると、列をはなれて、——千鶴はその時、外燈の光を受けた男の顔を見て、思わず、ああ、と声を立てた。
「どうしたの？」
「知ってる人だったわ」
「だあれ？」
「それが、いま思い出せない……」
三十歳になるだろうか。削ぎ立ったような、鋭い男の顔である。
「あれ、だれ？」
「あれ、だあれ……？」
五百人も集まったかと思える、賑かなパーティの中では、そういう言葉が参会者の口から洩れることは、決して不思議なことではない。
会場には、明るい灯が降っていた。香料の匂いと酒の香りとが、たちこめている。音楽は鳴っている。笑い声は、絶え間なく湧いて流れる。客たちの中には、映画俳優がいた、舞台人がいた。テレビ・タレントも、演出者もいる。彼らの所属する会社の、社長や重役や宣伝部員もいる。更に、この夜のヒロイン鹿内園子の、個人的な知人や友達が集まっている。
一目で、ああ、あの人、と分る人たちも多いが、よく知っている人だとは思いながら、急には名前の思いうかべられない顔もある。だから、カクテル・グラスやハイボールのコップを手にしながら、あれは誰だろう？　あれは？　と囁き合

う人の多いのは当然なのだが、——千鶴はその時、彼女の周囲で起った声の主たちが、一様に同じ人を指して言っているような気がしたから、思わずふっとふり向いたのだった。

彼女の勘は、狂ってはいなかった。

五人も、十人もの視線が、同じ方向に流れている。その視線の流れを追って、彼女は思わず、ああ、と言いそうだった。なぜか、かすかに怯えそうであった。

横手の卓子(テーブル)から離れて、壁に背をよせたまま、一人ぽつんと立っている男、それが、またあの男だったからだ。

浮かない、顔だった。知り合いがいないのだろうか。つまらなそうな目を、天井に向けている。さっきのような惨忍な目の色は消えていたが、つまらなそうな表情の中に、今度はかすかな薄笑いがにじみ出しているだろうか。

その男の顔に、千鶴の間近にいる人たちの目が、いっせいに注がれているのである。

——妙に、この場にそぐわない人なのだわ。

けれども目をとめていると、彼女は急に、記憶の中でもはるかに遠い、奇妙な面を思い出すのだった。故郷の祭の夜の、急ごしらえの舞台で見たものであろうか、それとも、どこかの美術館ででも見たものであろうか。子供なら、こわいと言って泣き出すかもしれない、不気味な冷酷そうな面。

——あの顔には、血が通っていないのじゃないかしら?

と、頸をかしげようとすると、

「あなた、やっぱりあの人を気にしているのね」

治子の囁きが、かすかに落ちて来た。

「ちがうわ」

「でも仕方がない。なんとなく気になる顔なのよ。だから……」

その辺りに立っている有名な俳優たちよりも、人目を集めているといいたいのであろうか。

「きれいな人、というのでもないし……」

「待って!」

と、千鶴は言った。

そう言いながら、耳はするどく、小さな呼び声を捉えている。

「京都の黒石様、京都の黒石様はいらっしゃいませんか」

人びとの間をすりぬけて、白服のボーイが歩いて来ていた。ボーイは千鶴の脇から壁ぎわに出ると、相変らず小さく呼びながら、男の方に近づいてゆく。

「分ったわ」

と、千鶴は言った。けれども、目は男から離さなかった。

「誰なのよ」

「待って……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

手をあげて、相手を抑えた。
「いま、あの人、ボーイさんと口をきくわよ」
そう言った時、男はひょいとこちらを向いた。なるほど、客たちの間をすり抜けて行ったボーイを、迎えるような目になった。壁から背をはなして、ふたことみことやりとりをする、と、今度はすっきりと背をのばし、人びとの間を分けて出口の方へ歩き出した。
その後姿が、はなやかな人の群の向うへ呑まれてしまうと、辺りの空気が急になごむようであった。
卓子に近い客たちは、なぜかほっとしたような顔になり、磨き上げられた皿をそれぞれ手にとった。飾り立てた料理に、フォークをのばす。遠い卓子では、突然拍手が起った。着飾った新郎新婦が、卓子から卓子へ歩きはじめたらしい。カメラのフラッシュが、あわただしく光った。
千鶴はいくらか背のびをして見たが、今夜の主人公たちの姿は見えなかった。こちらの卓子までまわって来るには、まだ時間がかかるだろう、と思ったから、
「あの人ね、以前、あたしが働いたことのある会社の社長さん……」
「え?」
「社長さんの顔を忘れてしまったなんて、おかしいと思うでしょう? ところがそうではないの。一年近くつとめている間に、会社で顔を見たことは一度か二度……」
「出て来ないの? 会社へ……」
「そう。いま考えても、おかしな会社だったけれど……」
「青青社」というのが、その会社の名前である。京橋の十字路に近い古いビルの中にあって、社員は六人だけ。ひどく凝った本を作る出版屋だったが、千鶴が入社した時は、まだ二、三冊より本を出してはいなかった。
社長は、まず絶対に出社しない。経験をつんだ優れた編集長がいて、これがどこかで社長に会って来る。そして、時間をかけて贅沢な本を作る。出来上った本は一部では評判を呼んだが、発行部数はもちろん少い。ということは、商売にはならないということだ。
「もう少し、売れる本を出したら……?」
というのが、ほとんど全部の社員の希望だったが、欠損は承知で、まずいい本を作る。会社の格が出来てから、手を拡げるというのが社長の意向で、給料はよかったが、仕事はひどく少かった。手持ちぶさたな日さえある。そんな状態で、彼女は十カ月もつとめただろうか、うまが合うと思われていた社長と編集長とが、突然、喧嘩をした。編集長が辞めてしまうと、もう仕事は進まなかったし、若い社員たちには新しく踏み出す力もない。
「それで、自然崩壊よ」

「へえ。そんな人が、なぜ今日ここに……？」
「多分、鹿内さんの着物を……」
「本作りから、呉服屋さん？」
「あの人、西陣の大きな織元の息子なのよ。いわば、老舗のぼんぼん……」

鹿内園子は新郎と肩をならべながら、卓子から卓子へ挨拶をしてまわっていた。

司会者が、参会者の中の、何人かの人を指名した。その人たちが短いテーブル・スピーチをする間だけ、彼女はその場所に立ち止った。が、次の人に替る間にも、彼女は新しい卓子へ移っていった。

綸子に大きな菊を染めて、金糸銀糸の縫いとりの多いふりそでが、細身な体に重そうであった。

「見事なお召物……」
「立派な帯……」

その人の美しさについては、いまさら誰も口にしなかった。が、着ているもののあでやかさには、女たちは思わず嘆声をあげるのである。

ボーイに呼ばれて行った、黒石青太郎が帰って来た。かすかに眉をよせて、もとの壁ぎわに戻ろうとしたようだったが、もうそこには別の男が二人向い合って、立ち話をしている。おや、と、また自分の身をおちつける場所を探そうとするらしい。ゆっくりと辺りを見まわすと、ちょうど花嫁が歩み寄って来るところだった。いきなり、顔を合わす。

「やあ……」

というような表情が、不意に無邪気だった。

千鶴はまた、胸が鳴るようである。そんな明るい表情を、今夜の彼の上に見たことがなかったのだ。——いや、以前からそんな微笑を、彼の顔に見出したことがあったであろうか。

「おめでとう」

と、男は言った。

「あら、黒石さん、わざわざどうも……」

園子が、大きな目を見張るようにして、

「よく、あなたが……」
「親父の代理です」
「そう……？　それでもうれしいわ」

周囲の人たちは、おどろいたような顔をして、その二人のやりとりを見ていた。その男が何者か？——という疑問は、いっそう人びとの胸の中に拡がるようだ。

花嫁は、傍の花婿を、黒石に紹介した。それから、

「この方のお父様に……」

世話になっている、とでもいいそうな表情で、一度新郎を

仰いでから、
「お父様は、お元気で……？」
「いや……多分、萎れ返っているでしょう」
「あらなぜ？」
「家が、破産しました」
不意打ちだった。園子の目に、一瞬、え？　といいそうなおどろきの色が流れ、それがおさまると、またあふれ出るような微笑になりながら、
「こちらは、よくとんでもない冗談を仰有る方だから……」
「やあ」
黒石が、苦笑して、頭に手をやった。
——あら、冗談かしら？　冗談にしても、こういう場所で……。
不謹慎な冗談ではないか、と、千鶴が心を波立たせるのと、彼女の周囲に奇妙な動揺が起るのと、果してどちらが早かっただろうか。
「おかしな奴だね」
黒石を非難するらしい声が、忽ち千鶴の横手から洩れていた。
花嫁がすぎて行ってしまうと、黒石青太郎はむしろ明るい表情になっていた。
「おかしな人ね。なんだか家が破産したようなことを、言っていたじゃないの」
「そう、あたしもそう聞いたわ。でも、あの人のお家って、そんな、ちょっとやそっとで破産するような家じゃないのよ。きっとまた自分で仕事をして……会社でもはじめて、つぶしちゃったんじゃない？」
「そんな所かもしれないわね」
黒石青太郎は、何分間かその辺りにたたずんでいた。が、千鶴たちが再び気づいた時は、もうそこからは見えなくなっていた。
知人にでも、行き合ったのかもしれない。行き合った人と、どの卓子で、立ち話でもしているのかもしれない。
黒石の姿が見えなくなると、辺りの人たちもおちつきをとり戻したようである。——という言い方は、誇張にすぎるだろうか。周囲には、有名人が多かった。はなやかな職業の、ちょっとした生活上の変化があっても、世間から注目を浴び易い人たちばかりである。そういう人たちが、名もない一人の男、黒石青太郎の存在などに、いつまでかかずらっているだろうか。
しかし、たしかに人びとは、しばらくの間、黒石の存在を気にしていたのである。そういう事実が、千鶴の胸にはわだかまっている。

「あなたは、もと働いていたところの社長に、挨拶もしないでいいの？」
と、治子に言われたが、
「だって……あちらじゃあたしのことなんか、覚えてもいないでしょう」
二人は卓子に近づくと、氷の上にならべられた生牡蠣を手にした。牡蠣は冷えていて、海の匂いがしみている。
「おいしいわ」
「ほんと……」
と、治子は合槌をうって、
「立派なお料理ね。お客様も多いし……大変なかかりだと思うわ。一体、ああいうスターなんてどれだけの収入があるのかしら？」
「さあ……」
「あら、さあ、だって……。あなたなんか、あの人の金庫を握っているんでしょう？　教えてよ、いったいどのくらいの収入があるものなのか、おとぎ話をきくように聞くわ」
「金庫を握っているなんて、変な言い方をしないで……」
近くにいた男たちが、おや、という顔で千鶴を見たから、彼女はかすかに紅くなりながら、
「あたしは一番縁のうすい使用人よ」
「顧問じゃないの？」
「とんでもない。算盤をよせてあげるだけ……」
黒石青太郎の青青社がつぶれると、彼女は人の世話で別の大きな会社に入った。所属は経理部だった。
経理などに縁のない千鶴は、それから一年間、経理専門学校に通った。国家試験に通れば、税理士になれる。しかし、国家試験は受けなかった。その代り、アルバイトのような形で、鹿内園子の財政を見るようになった。

千鶴が、鹿内園子の家へ通うようになって、もう二年に近い。といって、千鶴が口にしたように、彼女が園子の使用人だというわけではない。
税金の申告に困った園子が、経理学校を出た千鶴に、無理にたのみ込んだといえば当っているだろう。
「助けて下さらない？」
といわれた時、千鶴は一度は、あら、とても、と、その申し出から逃げようとしたものだ。
「毎月、税理士の人が来ていらっしゃるんでしょう？」
「でも、その人に見せる書類の方が、巧く出来ないのよ」
園子は職業柄、青色申告をしつづけて来たが、申告する収支の整理がつかないのだった。
頼まれて、通い出した。
会社の帰りに立ち寄って、その日その日の園子の収入、支

出を記帳する。収支の種類——たとえば映画の出演料、ラジオ、テレビの出演料、座談会の謝礼など——は、それぞれ分類しなければならない。それから支出の方は、台所の経費から、本人の小遣い、旅費、家族の出費、その他一切を明細に記載して置かなければならない。その帳簿を、月一回通って来る税理士に示して、年度末の申告の準備を重ねる。

支出を明確にするために、千鶴は園子に向って、あらゆる領収書を手渡してくれるように頼んだ。

そして千鶴は、手渡される領収書の中に、しばしば京都西陣、千石庄兵衛という名前を発見するのだった。

「呉服物は、京都から……？」

「だって、そこの家の着物、あたしとても好きだから……」

受領書の金額は、二、三万円のこともあったが、一度に十万を越えることもある。

ある日、千石庄兵衛の受取が、四、五枚一度に手渡されたことがある。

「着物、作りすぎたかしら？　ごめんなさい」

京都へ仕事に行って、半月ほど滞在している内に、作った帯と着物だという。

「いい織元さんなんでしょうね、大きな……」

「そう。本当は黒石って苗字なの、〝千石〟は家号かしら？」

「黒石……？」

千鶴はそのひとことで、鹿内園子と黒石青太郎の間に張り渡された、見えない糸の存在に気づいた。が、園子がたとえ、その人の父親とは知り合いであっても、青太郎自身と知り合いだとは思われない。何しろ青太郎といえば、西陣を嫌って、——そういう仕事の世界をきらって、ずっと前から東京へ出てしまった男である。

——いま、あの人はなにをしているのだろう？

千鶴は、昔、幾度か見たことのある男の横顔をちらと目にうかべたが、園子に向ってその人の名を口にしようとはしなかった。

花やかな披露宴が終った時、千鶴たちはいくらか上気していた。

エレヴェイターで五階へ上ると、奥の広いロビイは、もう閑散としている。ベージュの絨毯をいっぱいに敷きつめて、美しい卓子と椅子のセットが、七つ八つ。高い天井からは、ほうづきをつないだような形の和風の飾燈が、何本か静かに吊り下げられている。

「あたし、ちょっと電話するわ」

と、治子が言うから、二人は奥のロビイを横目に見て、出入口に近い辺りを横切った。公衆電話は、そこからはつき当り右手に、いくつかのボックスをならべている。

その一つの扉に、治子が手をかけようとした時だった。

「そんなことを言ったって駄目だよ」
不意に、荒々しい声がしたと思うと、
「破産しちまったもの、いまさらじたばたしたって仕様がない……」
治子が開けようとしたボックスの、すぐ先隣らしい。
——おや。
と、千鶴は治子を見た。
——また、破産という言葉を聞いた……。
と思うと同時に、さっき会場で幾度か見た、黒石青太郎の顔を目にうかべた。と、ちょうど目を注いでいた電話ボックスの扉がいきなり開いて、その顔が、——いま、彼女が目にうかべたばかりの顔が、一メートルと離れぬところに立った。
「ああ」
千鶴は思わず小さく囁いて、会釈をした。と、相手の顔には思いがけない羞恥が流れて、
「失礼……」
それは、電話で喋っていた自分の声の、高すぎたことを謝まったのだろうか。それとも、不意に女たちの前へ姿を現した、その荒々しさに気づいたからであろうか。
「びっくり、なすった？　御免なさい……」
しかし、男はそれ以上、口をきく必要はないと思ったのだろう、軽く会釈をすると、そのまま出入口の方へ歩き出そうとする。
「黒石さん……」
千鶴は、無意識のうちに相手の背に向って呼びかけていた。

どうして急に、声をかける気になったのだろうか。ふり返った男の目が、まっすぐに千鶴を捉えて来た時、彼女は不意にはげしい狼狽の中へ陥るのだった。
男の顔には、一瞬、なまなましい傷口に触れられた時の、痛みに似たものが走るようであった。その僅かな時間がすぎると、今度はおや、これは誰だろう？　と、頸をかしげる表情になった。警戒する者の顔だった。いわば、どこかで罪を犯して来た者が、突然、見知らぬ人に呼びかけられる、その途端に、自分がどういう態度をとったらいいかと思いわずらう、あのあわただしさであった。そして、そのあとには、一種のふてぶてしさ、——どうなったところで、大したことはないと多寡をくくった、度胸のよさがうかび上るようである。
「どなたでしたか？」
静かな、男の声であった。
千鶴はその声を聞きながら、少しも予期しなかった羞恥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com